

学びを支える文房具「ノート」は、使い方も十人十色。字体、濃淡が分かるため、ある意味、パソコンなどのデジタル機器よりも豊かな情報を残せる。落書きさえも個性を表現する貴重な記録。勉強では、間違いの跡が残せる点で優れている。特に、論理的思考力や表現力が問われる昨今では、文章の記述に使われており、その使い方も様変わりしつつあり。

【福田隆】

「3ケタかける1ケタの筆算の仕方を考えて、みんなにわかりやすく説明できるようにしましょう。さあ、始めてください！」

東京都板橋区立蓮根第二小の3年生の算数の授業は、習熟度別に分かれている。18人のグループによる授業で取り組んだ問題は「312×3」と「386×2」の2問。しかし、単純に解くだけではないところに、この授業の狙いがある。

子供たちは頭を抱えながら「自分の解き方」の説明をノートに書き始めた。ある男子児童は「これからひっ算のせつ明をします。まず、くらいをたてにそろえて書きます」と説明。女子児童は「312は100が3つで、10が1つで、1が2つです」と数字を分解し、筆算の段を分ける意味を強調する。

このプロセスが重要だ。学力低下の一因として、小学校中学年での「つまずき」が指摘されている。教師や親がノートをみることで「つまずき」

使い方多様化 思考力重視へ



ノートを見せながら、かけ算を筆算で解く流れを確かめ合う児童たち＝東京都板橋区立蓮根第二小学校で9月28日、福田隆撮影

ノート

に気付く、適切に指導することができ

10分後、子供たちのノートには、数字よりも言葉が多く並んだ。3人

自ら考える力を育成 ■「つまずき」も見つけやすく

ずつ6班に分かれ、互いに「自分の解き方」を説明し合う。互いのノートを指しながら議論は白熱する。担当の後藤栄教諭(42)は「間違っ

「キョクトウ(極東)ノート」で知られる大手メーカー「キョクトウ・アンシエイツ」(本社・大阪市)

にノートの歴史を聞いた。戦後の混乱が落ち着きつつあった1948(昭和23)年、同社は活版

87年には「図かん学習帳」が登場した。外表紙にピラミッドなど世界の

中、他社との競争に勝つポイントはスバリ、ユーザーの好みの把握だとい

動物たちの写真と生態に関する情報を表紙などに記し、88年に発売された「ムツゴロウの学習ノート」では、外表紙の色を決める際に、学校の協力を得て子供に調査を実施。下校時間帯に徹底的に聞き取った結果、低学年が明るい青色、高学年が緑色を好むことが分かり、商品に生かした。一方、空振りの例も。88年の学習指導要領改定で創設された「総合的な学習の時間」では、どんなノートが求められるのか分からなかった。教師に調査し、右ページに図表類、左ページに調べた結果の記述類という二色が判明。商品化したが売れなかったという。

同社広報担当の田崎久美子さん(31)は、小学校時代にムツゴロウのノートで勉強し、動物が飼いたくなくなった思い出がある。「ノートとは、子供の学習と成長の軌跡です」

蓮根第二小の算数の授業は「振り取り」で完成する。手順を雑に考え、計算結果を間違えた男子児童は「友だちの意見で直せた。やっぱり友だちはすごいと思った」と記した。

保護者として、授業を見ていなくても、ノートを見れば我が子の「学びの風景」が見えてくる。石井雅喜校長は「ノートに書く習慣を身に付けば、考えが整理できるし、相手に伝えることもできる。3年生くらいで、そういう基礎を身に付けさせたい」と話す。



1964(昭和39)年以降に発売された極東ノート(現在のキョクトウ・アンシエイツ)の学習ノートの一部。1冊200円の頃もあった(福田隆撮影)